

社会の「絆」はどこから作るのか?子供たちの成長と教育と行動範囲を考えれば、まず小学校が適当だ。小学校は都会にも、都会でなくても、小学生が通える範囲にある。学校の先生たちは子供たちの勉強だけでなく、体操、給食などをはじめとして、子供たちの日中の活動を見ている。いくら手があっても足りない。

家庭では多くのお母さんたちは、家庭内の仕事ばかりでなく、外の仕事を持つ人も多い。子供たちの面倒をみるだけでも大変だ。特に日本のような「男性」社会では、働く女性の負担は、きわめて大きい。精神的にもきつい。

小学校に通う子供たちが住んでいる地域の人全員が、自分たちの時間のあるときに小学校に行くのはどうだろう。皆で先生を支援し、子供たちを自分の子や孫のように^{はぐく}育む気持ちを共有する。放課後は、例えば6時までは子供たちも学校にすることに。お母さんが仕事から帰るのを、学校で待てるようにするのである。その間、学校で皆がグループで子供の遊び、宿題、勉強などいろいろな活動に参加する。叱るときは叱る。けんかの仲裁も見られる。徐々に、子供を中心に地域での知り合いが広がる。

街中で皆が知り合いになっていく。子供を見かけると声をかけるようになる。子供たちも、小さいときから街のどこでも、皆が自分たちのことを気にしているのはうれしいこととを感じるだろう。

絆
きずな



このような活動が、地域で世代を超えて広がっていくことこそが、地域社会の「幼若壮老」世代間を含めた「絆」を作り出し、「核家族」の課題を支援し、人間社会としての健全なあり方を取り戻すきっかけにもなる。子供たちの社会教育にもなっていくのである。

ここには中高校生、大学生、大学関係者は積極的に参加すべきだ。このような活動を通して、学校の先生の仕事を理解し、苦勞を理解するようになり、また、将来の選択肢としての学校の先生にも興味をもつ好循環を形成していこう。

地域からの「絆」は、社会的動物「ヒト」の生き方の基本なのである。



黒川 清 (くろかわ きよし)

政策研究大学院大学 教授

1962年東京大学医学部卒業、68年同大医学部第1内科助手。69年ペンシルバニア大学医学部生化学助手、73年UCLA医学部内科助教授、74年南カリフォルニア大学医学部内科准教授、77年UCLA医学部内科准教授、79年同教授、83年東京大学医学部第4内科助教授、88年同大医学部第1内科教授。96年東海大学教授・医学部長、同大学総合医学研究所長など歴任。2003～06年日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議長、04年より東海大学総合科学技術研究所教授、東京大学先端科学技術研究センター客員教授。05年特定非営利活動法人日本医療政策機構代表理事、06年より08年まで内閣特別顧問を務める。06年より政策研究大学院大学教授。

(撮影:佐久間哲男)